

二つの徳の序列化

— 「節度ある感情（メトリオパテイア）」と「感情のない状態（アパテイア）」をめぐる —

田 中 龍 山

はじめに

先の論文では⁽¹⁾、人間の感情のあるべきすがたをめぐる、ヘレニズム時代、感情に節度を与えること（メトリオパテイア）を徳とみなす立場と、すべての感情から解放されること（アパテイア）を徳とみなす立場とのあいだで、論争が展開されていたことを確認した。本稿は、その後、とりわけ新プラトン主義において、二つの徳が対立関係ではなく、序列化されていく様子を、さまざまな著作や証言をもとに追跡したい。

手順としては、まず、新プラトン主義者であり、プロティノス（205-270）の弟子であるポルフェリオス（234-305 以前）の著作で両概念が明確に、上下関係において位置づけられていることを確認する（第1章）。そして、その原型としてプロティノスの思想を示すとともに、そこでは、ヘレニズム時代とはまったく異なる図式でアパテイア概念が語られることを指摘したい（第2章）。さらに、二つの徳の序列化の源として、プラトンとアリストテレスの「徳」の区別を見定め（第3章）、最終的に、プラトンから新プラトン主義への流れと、アスパシオスなどのペリパトス派（アリストテレス学派）の流れが融合することで、二つの徳が序列化されたのではないか、という一つの仮説にたどり着くことを目的とする（第4章）。

第1章 ポルフェリオスにおける徳の序列

1-1. 「市民的徳」と「観想的徳」

まず、メトリオパテイアとアパテイアという二つの概念が、徳の状態として対比的に語られている箇所を考察の出発点としよう。

T.1 「市民的徳（τὰς πολιτικὰς ἀρετὰς）に従った状態は、節度ある感情（μετριοπαθεία）のうちにみられ、その目的は人間本性にそくした生を営むことである。他方、観想的徳（τὰς θεωρητικὰς）に従ったそれは、感情のない状態（ἀπαθεία）のうちにみられ。その目的は神に似ることである」 32.29-32

ここでは「節度ある感情」が「市民的徳」の状態として、他方、「感情のない状態」が「観想的徳」のそれとして語られている。ポルフェリオスは、プロティノスの思想を受け継ぎ、「一者」からの流出として世界の生成を、「一者」への帰還として人間のあるべきすがたを説明する。その後者において「徳」が語られるのであるが、まず「市民的徳」を獲得し、その後「観想的徳」にいたる、という徳の段階がそこでは語られている。そしてそれぞれ「人間本性にそくした生」と「神に似ること」と言われているように、「魂と身体」からなる人間が「身体」から浄化されて、たどり着くのが「観想的徳」であるとされる。それは「魂」がもはや「知性（νοῦς）」へと帰還し、純粋な知性活動を行っている状態を意味する。そこに「感情」はまったく存在しない。一方、身体とともに生きる際には、身体に伴う「感情」を制御しなければならない。それがここで言われている「市民的徳」である。

さて、先の T.1 は ἀφορμαὶ πρὸς τὰ νοητά という表題で伝えられるポルフェリオスの著作からのものである。そのまま訳すと『知性的なものへの飛躍台』となるが、ラテン語で Sententiae（命題集）と称されたように、論述の形式

としては、プロティノスの思想が簡潔に、要約的に記されている。そして内容としては、表題に記されているように、「身体」に由来する感情から、非物体的な知性へとむかう「飛躍」が語られているのである。そこにメトリオパテイアとアパテイアが序列として位置づけられることになる。

1-2. ポルフェリオスにおける徳の四段階

では、両概念の序列をもう少し詳しく見ることにしよう。T.1では「市民的徳」と「観想的徳」という二つの徳が語られていた。だが、ポルフェリオスの語る徳の序列は二つだけではない。彼は次のように徳を四つの段階に区別する。

T.2「市民の徳（αἱ ἀρεταὶ τοῦ πολιτικοῦ）があり、観想へと上昇するゆえに観想的と呼ばれる者の徳（αἱ τοῦ πρὸς θεωρίαν ἀνιόντος）があり、またすでに完全に観想的であり、すでに観想者となった者の徳（αἱ τοῦ ἤδη τελείου θεωρητικοῦ καὶ ἤδη θεατοῦ）があり、また知性であり魂から浄化されているかぎりの知性の徳がある」32.1-5

最初の「市民の徳」は先の「市民的徳」と同じである。だがここでは、「観想的徳」は二つに分けられ、「観想へと上昇する人の徳」と「すでに完全に観想的であり、すでに観想している者の徳」という段階に区別される。それらのうち、観想へと上昇する、浄化の過程にある状態を「浄化的徳」とポルフェリオスは呼び、「観想的徳」と区別するのだ。さらに、「観想的徳」の後に、「知性の徳」が第四の徳に位置付けられる。それは、魂の徳である「観想的徳」の「範型」として、「知性」それ自体の徳であり、「知性の実体と軌を一にしている」（33.71）状態である。

そして、具体的な徳目としてポルフェリオスは、「市民的徳」には「思慮」「勇気」「節制」「正義」を挙げる。

T.3「市民的徳は、行為に関する義務の勘案に付随して起こるために、感情の抑制に存している。それゆえ、この徳は隣人を害さない共生を目指しており、群集うことと共生にちなんで「市民的」と呼ばれる。この徳はまず「思慮（φρόνησις）」であり、〔魂の〕思考的部分に属する。次に「勇気」であり、気概的部分に属する。また、「節制」欲求的部分の思考的部分に対する協調と調和のうちに存する。さらに「正義」であるが、それは魂の諸部分が支配・被支配の役割分担を一斉に果たすことにある」32.6-14

これらの徳目はプラトン『国家』で議論された、古代ギリシアにおいて馴染みのものである。それらが魂の三区分に基づいて説明されている点も、基本的にはプラトンに倣うものであろう。そしてポリュプリオスは「市民的徳は浄化の先導者とも言える」（32.20-21）と言う。では、浄化において獲得される徳目はどのように説明されるのか。

T.4「それゆえに、浄化のさい。肉体と思いなしをともにせず。魂だけで活動すること（μόνην ἐνεργεῖν）が「思慮」を存立させるが、それが完成するのは、純粋な知性の働きを（καθαρῶς νοεῖν）とおしてなのである。また、〔浄化のさい〕⁽²⁾ 感情に賛同しないことが「節制」を成り立たせる。魂が肉体から離れる折、何か空虚、非存在へと向かうのではないかと恐れないことが「勇気」を〔成り立たせ〕、理性と知性が（λόγου καὶ νοῦ）支配し、何ものもそれに抗しないとき「正義」がある」32.23-29

ここで挙げられている徳目は「市民的徳」のそれらと同じである。だが「理性と知性が支配」している点が大きな違いと言えるだろう。また、注目しなければならないのは、それらの徳が、浄化の過程と、浄化の完成としての「観想」の二つにまたがって説明されている点である。ポルフュリオスは

「浄化（κάθαρσις）とは一方、浄化の過程（καθαίρουσα 現在分詞）であり、他方、浄化され終えた者（κεκαθαρμένων 完了分詞）に属するのであるから、浄化的徳はこの両方の意味で考察される」（32.33-35）と言う。そして、まず「過程」として考えた場合、ポルフェリオスは「この（浄化的）徳はアパテイアを志向しているがまだメトリオパテイアにある」（32.135）と述べている。つまり「純粋な知性のはたらき」による浄化の完成以前においてはなお、「市民的徳」と同様の徳目が「理知と知性が支配」したうえでメトリオパテイアのために必要となるのである。

そのうえでポルフェリオスは「観想的徳」を、「魂の知性的な活動（νοερῶς τῆς ψυχῆς ἐνεργούσης）」（32.56-57）として次のような徳目を挙げて説明する。

T.5 「「知恵（σοφία）」と「思慮」は、知性が有するものの観想のうちにある。「正義」とは己の役割を果たすことだが、〔この場合〕知性に付き従うことにあり、知性へと向かう活動である。「節制」とは、知性へと内側に向かうことである。「勇氣」とは、〔魂が〕眺める本性的に感情のないもの（ἀπαθὲς ὄν τὴν φύσιν）に似ることによって〔備わる〕感情のない状態（ἀπάθεια）である。そして、これらの徳は、〔市民的徳において〕そうであったようにお互いに相伴うのである」 32.57-62

ここでもいくつかの点に注目しておきたい。まずは、ここでも同じ徳目が語られているが、すべてが「知性に向かう状態」として説明されていることである。「勇氣」もまたアパテイアと述べられているのである。もう一つは、「思慮」と並んで「知恵」という徳目が語られており、その働きが「知性が有するものの観想」と説明されている点である。これらのことは、やがて（第3章で）、プラトンの由来とアリストテレスの由来を確認した時に、整理しなおす必要がでてくるであろう。そのような「知」の様々なあり方とともに、メトリオパテイアとアパテイアという魂の状態に関連して語られる徳の

あり方を、ポルフェリオスに関して以下のようにまとめておきたい。

ポルフェリオスの徳

	感情のあり方	知のあり方
「市民的徳」① [Por.1] 行為に関する義務 32.6	メトリオパテイア T.1	まず思慮 T.3
「浄化的徳」② [Por.2] この世のものからの離脱 32.15	アパテイアを志向しながらも メトリオパテイア 32.135	身体と結びついている自己を 知ること 32.101
「観想的徳」③ [Por.3] 自身を生み出したものとともに ある 32.51	アパテイア T.1	理性と知性が支配 T.4 知恵も思慮も知性が有している ものを観想している T.5
「知性の徳」④ [Por.4] 「魂の徳」が模範とするもの 知性の実体と軌を一にしてい る 32.71	本性上アパテイア T.5	知性そのもののうちにある 32.63-65

第2章 プロティノスにおける二つの徳

2-1. 「市民的徳」と「より高次の徳」

つづいて、ポルフェリオスの師であるプロティノスの著作を取り上げ、メトリオパテイアとアパテイアがどのように語られているかを確認しよう。ただその前に、ポルフェリオスとの比較という点で二つのことをあらかじめ示しておきたい。一つは、ポルフェリオスが徳を四つに分類したが、プロティノスでは、名目上は二つの区別しか見いだされないということ、もう一つは、プロティノスの議論の中で「メトリオパテイア」という名詞は用いられていない、ということである。

ではまず、『エネアデス』1.2 論文「徳について」を取り上げることにしよう。

う。その冒頭で、プロティノスは次のように述べる。

T.6「この世には数多くの劣悪なものがあって、われわれの住むこの場所をさまよっている。これはどうしても必然なことであるし、魂はその劣悪なものから逃れようとしているのであるから、われわれはこの世〔つまり感性界〕から〔あの世・知性界へと〕逃れるようにしなければならない」1.2.1.1-3

ここでは魂の「知性的なもの」への上昇が示されており、「世から逃れる」とは T.1 と同じく「神に似ること」(1.2.1.3-4) と言い換えられる。そしてその内実は「徳を所有すること」(1.2.1.6) であるとして、まず「市民的徳」について、プロティノスは以下のように説明する。

T.7「市民的徳 (πολιτικά ἄρεται) は、・・・われわれを本当の意味で秩序づけ、欲望および一般的に言って諸感情に節度を与え (τὰ πάθη μετροῦσαι)、偽りの思いなしを除去して、われわれをより善き者とする」1.2.2.13-17

「メトリオパテイア」という名詞は語られていないが、ここで言われている「感情に節度を与える」とは、まさにその状態である。だがそれは、厳密な意味での「神に似ること」にはならない。プロティノスは、「市民的徳」よりも「より高次の徳 (τῆς μείζονος ἀρετῆς)」(1.2.3.1) があることを、プラトンを引き合いに出しつつ、以下のように述べる。

T.8「プラトンは、「神に似るということは、この世から逃れることである」と言ったり、日常の市民生活に関係している徳を何の制約もつけずに徳と呼ぶことはせず、「市民的な (πολιτικός)」という言葉をつけ加えたり、また別のところでは、徳を「浄化 (καθάρσεις)」と呼んだり

している。この場合、彼は明らかにすべての徳を二通りにわけて、神に似ることを市民的徳によるとみなしてはいないのである」 1.2.3.5-10

ここで言われている「浄化」とは、魂が「身体と意見を同じくせず、ただ自分だけで活動すること（μόνη ἐνεργοῖ）」（1.2.3.15）である。それが「神に似ること」であり、そこにおいて「魂が知性を働かせ、そうすることによって感情のない状態（ἀπαθείας）」（1.2.3.19-20）を獲得するのである。

そして、この T.8 や先の T.7 も含めると、第 1 章で示されたポルフェリオスによるメトリオパテイアとアパテイアの序列の原型を見て取ることができるだろう。すなわち、「市民的徳」とは感情に節度を与えている状態であり、それよりも「より高次の徳」によって感情のない状態にいたる、という徳の序列、および方向性である。

では、それぞれどのような徳目が挙げられているかについても確認しておこう。まずは「市民的徳」についてである。プロティノスは「感性界」に住むわれわれの徳のあり方を次のように説明する。

T.9 「いや少なくとも、次に述べるような「市民的と言われる徳（τάς γε πολιτικὰς λεγομένας ἀρετὰς）」をもっていると考えるのは、理にかなっていないだろう。すなわち〔われわれの魂の〕思考する部分に関連している「思慮」、気概にかられる部分に関連している「勇気」、欲求的部分が思考する部分にある種の同意と協和を与えることによって成り立つ「節制」、魂のそれぞれの部分が支配する立場と支配される立場にたつとともに自分の本分をつくすこととしての「正義」が、それである」 1.2.1.16-21

ここでも、プラトンが語った徳目がプラトンによる魂の区分にそくして説明されている。先のポルフェリオスの T.3 は、このプロティノスの主張に基づいているのである。では、プロティノスにおいて、先の過程としての浄化

[Por.2] と、浄化の完了によって獲得される状態 [Por.3] はどのように説明されているのであろうか。

ポルフュリオスとの違いを確認しておく、まずプロティノスは「浄化の徳」と「観想の徳」という区別はしていない。さらに、「知性の徳」[Por.4] については、論外となっている。もちろん、知性において、魂の徳が「模範」とするところのものが存在することは認めている。また知性は「知恵であり思慮である」(1.2.6.12) という主張も行っている。それらの点はポルフュリオスが語っている通りである。しかしながら、「徳は魂のものなのであって、知性も知性のかなたにあるもの〔一者〕も、徳をもってはいない」(1.2.3.31) と述べ、プロティノスは、あくまでも人間のよき生き方の中で「徳」を議論していたのである。プロティノスが語る徳は、「市民的徳」と「より高次の徳」の二段階のみである。

しかしながら、ポルフュリオスによる「浄化的徳」と「観想的徳」との区別の源となる考え方はプロティノスにおいても示されている。プロティノスは、「浄化 (κάθαρσις)」を「浄化されること (καθαίρεσθαι)」(現在不定法) と「浄化され終えていること (κεκαθάρθαι)」(現在完了不定法) に分けて、こう語っていた。

T.10 「浄化されることの中にある徳は、浄化され終えていることの中にある徳よりも不完全である。なぜなら、浄化され終えているとは、いわばすでに目的に達していることだからである」 1.2.4.4-5

プロティノスの「より高次の徳」においては、「自分と同族のものと交わることが魂の善」(1.2.4.14) と言われるような状態をすでに獲得している。しかし、その前段階として、「反対のものと交わること」から自ら転じていなければならない。「同族のもの」とは魂がそこから由来してくる場所の「知性」であり、「反対のもの」とは「身体」である。そうすると、まずは「知性への向け変え」が必要なのである。プロティノスはその移行を「向き

を変えたうえで（アオリスト分詞）交わる（συνέσται δὲ ἐπιστραφεῖσα）」（1.2.4.16）と言う。つまり、「浄化」とは、魂が身体から知性へと向きを変えることであり、それが完了した後で「知性と交わること」が成立する、と言うのである。その順序をプロティノスは次のように言う。

T.11 「では、魂は自分を浄化した後で向きを変えるのだろうか。いや、浄化し終えた時には、すでに向きを変えているのである。してみると、魂の徳とはこの向きを変えることなのだろうか。いや、むしろ、この転向によって魂に生じるものが徳なのである」 1.2.4.17-18

すなわち、浄化の過程ではなく、「転向によって魂に生じるものが徳である」とここでは明言されている。たしかに、先の T.10 を読むと、プロティノスが「浄化されることの中にある徳」と「浄化され終えていることの中にある徳」とを二つの徳として語っているようにも見える。しかし、それは「浄化がこの種の徳と同じかどうか」という問いかけの中で語っていることであり、プロティノスが「より高次の徳」と考えているのは、T.11 で明確に言われているように、浄化の完了後の状態のみと理解するべきであろう。それはポルフェリオスの「観想的徳」[Por.3] に該当する。

では、その「徳」はどのような状態であるのか。活動としては「観想（θεά）」（1.2.4.19）である。そのとき、「魂は身体を離れて、自分をいわば場所に集中させるようにして自己自身に集中させ、まったく感情のない状態となる（πάντως ἀπαθῶς ἔχουσιν）」のは確かだろう（1.2.5.5-7）とプロティノスは言う。プロティノスの「より高次の徳」とは、魂の身体からの浄化が完了し、すべての感情から解放され、知性と交わるという観想活動を行うのである。それは「自分だけで活動すること（μόνη ἐνεργοῖ）」（1.2.3.15）であり、「知性が有しているものを観想すること（ἐν θεωρίᾳ ὧν νοῦς ἔχει）」（1.2.6.12）である。それを「知恵（σοφία）」と呼び「思慮（φρόνησις）」とプロティノスも呼んでいたのである（1.2.6.12）。他の「勇氣」「節制」「正義」といった徳

目に関しても、ポルフェリオスが説明する通り（T.4, 5）である。また、それらの徳目は「たがいに他を含みながら密接に関連している」（1.2.7.1）。そうでなければ「完全な徳」にはならない。そのことをプロティノスは次のように言う。

T.12「それにまたどの〔より高次の〕徳も、浄化を完了した時点で生ずるという意味で浄化と呼ばれるのであれば、魂は〔より高次の〕徳のすべてを浄化によって所有するのでなければならぬ。もしそうでなければ、どの徳も完全（τελεία）ではないだろう」1.2.7.8-10

ここで、プロティノスの徳も感情のあり方と知のあり方に注目し整理しておこう。

プロティノスの徳

	感情のあり方	知のあり方
「市民的徳」[Plo.1] われわれ身体的存在者を秩序づける T.7	「感情に節度を与える」 T.7	「思慮なしに習慣と鍛錬による諸徳」 1.1.10.12-13 思慮 1.2.1.18
「より高次の徳」への過程 [Plo.2] 「浄化されることの中にある」 T.10	「不完全」 T.10	魂を身体から知性へと向け変えること
「より高次の徳」[Plo.3] 「浄化され終えている」 T.10	「感情のない状態」 1.2.3.20 「感情をすべて取り去っている」 1.2.7.18	知性であり、思慮 1.2.3.15 「自分と同族のもの〔知性〕と交わっている」 1.2.4.14 「知性のもっているものを観想している」 1.2.6.12

2-2. プロティノスにおけるアパテイア

つづいて、プロティノスが「より高次の徳」と位置付けるアパテイアの状態を、『エネアデス』3.6 論文「非物体的なもののアパテイアについて」を手掛かりに、もう少し詳しく見ていくことにしよう。

すでに見たように、徳とは魂の状態であり、「より高次の徳」では「まったく感情のない状態」と言われる。しかしながら、魂が感情と無縁であるというのは、プロティノスにとっては原理的に当然のことである。というのも、魂は非物体的な存在であり、非物体的なものが何かを蒙ること、動かされることはありえないからである。魂は形相であり、むしろ動の原理なのである。何かを蒙るのは、質料としての身体に他ならない。そして魂と身体からなる人間にはさまざまな感情が生じるのであるが、それはあくまでも身体に生じるのである。それゆえ、まずは、その身体に生じた感情に節度を与えることが「市民的徳」として求められることになる。そして魂は、身体という下位のものに向かう場合、感情に煩わされるのであるが、他方、魂がそこから由来するところの知性に向かう場合、純粋な魂のみの存在となり、感情から解放される。それが先に言われた「より高次の徳」である。

そして、プロティノスは以上のようなアパテイアのあり方を、ストア派の主張を批判する形で説明する。つまり、ストア派によると、外的な事物は「魂の受動的部分」に「刻印」として「物質的に」影響を与える（*SVFI* 484c）。事物の表象も認識も、それに基づく感情も、魂の物質的な「変容」と説明されるのである。それに対してプロティノスは、「一般的に言って、質料のないものの活動は、変容を受けずに行われる」（3.6.2.49-50）と主張する。そして、感情があくまでも身体の働きであることを彼は次のように述べる。

T.13 「およそ形相たるものには、混乱やいかなる受動・感情（πάθος）もあってはならず、形相それ自体は平静を保っているけれども、受

動・感情が生じる場合には、その形相と交わっている質料が、その状態にかかわるのでなければならない」3.6.4.34-37

ここで言われている「形相」が魂であり、「質料」が身体である。だがもしそうだとすると、以下のような問いが生じることになる。

T.14「もし魂がまったく感情を持たない（ἀπαθη）のであれば、なぜ、われわれは、哲学によって、その魂を外的な影響に支配されることのないよう努めねばならないのだろうか？」3.6.5.1-2

プロティノスの回答は以下である。

T.15「魂の「受動的と言われる部分（τοῦ λεγομένου παθητικοῦ）」に入り込んだいわば「表象のごときもの（οἷον φάντασμα）」が、その結果としての感情すなわち混乱を作り出し、その混乱に予期される災いの視覚像が結び付けられるものであるから、哲学的な言論が「感情と呼ばれるこの種のもの（πάθος τὸ τοιοῦτον λεγόμενον）」を完全に取り除いて、魂の中に生じさせないように要求したのであって、それは、この種のものが生じるようであれば、その魂はまだよいあり方をしていてのではないが、生じないようであれば、その状態の原因者としての、魂にかかわる視覚像が、もはや魂の中に生じることはないのだから、魂は感情のない状態（ἀπαθῶς）になる、との理由からである」3.6.5.2-9（傍点は筆者による）

プロティノスはストア派の概念を用いながら、アパテイアへの移行を語っている。しかし実のところ、魂の「感情」とは、「感情と呼ばれるこの種のもの」であり、魂の「受動的部分」などは本来ありえず、「受動的と言われる部分」にすぎないのである。感情が生じない状態は、それを作り出す視覚

像が生じないことによって可能となり、それが身体からの「浄化」なのである。

T.16「浄化とは、魂が自分以外のものに目を向けることをせず、また、どのような思いなしであろうと、あるいはすでに述べられたように、どのような感情（παθῶν）であろうと、自分に縁のない思いなしを持つこともしないで、自分だけの状態を保ち（καταλιπεῖν μόνην）、他と交わらず、影像に目を向けることもしなければ、影像から感情を作り上げることもしないことである」3.6.5.15

それに対して、ストア派のアパテイアは、それを説明する際に「よき情念（エウパテイア）」という概念が用いられたように、身体からの浄化という発想をそもそも持ち合わせていない。なぜなら、魂もまた「物体」だからである（*SVF* 142）。それゆえ、ストア派のアパテイアは、内実として論敵の言うメトリオパテイアと近いものになったのである⁽³⁾。だがプロティノスに言わせると、「彼ら（ストア派）は、上方のものを見ることができず、立っている場を他に何も持っていないがゆえに、徳という名目とともに、行為・実践へと、すなわち下方のものにおける選択へと引き落とされることになる」（5.9.1.12-15）のである。

ここに、同じアパテイア（感情のない状態）という言葉を使いながら、ストア派とプロティノスとでは決定的な違いがあると言えるだろう。ストア派においては、(1) 知者はアパテイアの状態にある、(2) アパテイアに達するためには、パトスを除去しなければならない、(3) パトスは誤った判断によって魂に生じる、(4) 誤った判断ではなく正しい判断を持つことによってパトスは除去される、という図式がある。そしてそこでの正しい判断は、究極的には善悪にかかわる認識であるが、そのことを可能にするのは、自然についての認識なのである（*SVF* III 68）。そしてその自然もまた、ストア派にとっては「物体」に他ならない。対してプロティノスにとって、自然が「物

体」からなるという点は同じであるが、まさにその点で「魂」の下位に位置づけられるのである。それゆえ、プロティノスはストア派を「上方のものをみることができない」と批判するのである。しかしながら、ストア派にとっては、魂が非物体的なものであるという考え方もなければ、知性への、さらには一者への上昇という階層的な区別もない。同じくアパテイアという理想が語られながら、その内実はまったく異なると言えるだろう⁽⁴⁾。

第3章 序列化の由来

3-1. プラトンにおける徳の区別

3-1-1. 「市民的徳」と「浄化」の由来

ポルフュリオス、プロティノスの考察を通じて、二つの徳やその状態が序列化されていること、そして「浄化の完了」としてアパテイア [Por3] [Plo.3] がより高次に位置づけられたことを確認した。では次に、その由来を探ることにしたい。手掛かりとなるのは T.8 である。そこでプロティノスは、プラトンが「徳を二通りに分けた」ことを、また「市民的徳」「浄化」といった言葉を用いていることを伝えている。その個所をまず確認することにしよう。

『パイドン』において、ソクラテスは、「勇気と呼ばれているもの (ἡ ὀνομαζομένη ἀνδρεία)」(68c5)、「多くの人が節制と呼ぶもの (οἱ πολλοὶ ὀνομάζουσι σωφροσύνην)」(68c8-9) を取り上げ、前者は怖れや臆病さとのかわりで語られていることを、後者は「欲望に関して興奮せず、それを軽視して秩序正しくふるまうこと」(68c9-10) と語られていることを指摘しながら、次のように言う。

T.17 「このように快楽と快楽を取り換え、苦痛を苦痛に置き換え、恐怖と恐怖をとりかえるということ、そして大きい方を小さい方へと、

取り換えるなんてことは、そもそも徳を手に入れる正しい交換とは言えないだろうからね。いったい、それらはちょうど一定の通貨同士の交換であるかのようにだけでも、通貨としては、本来、かのものだけが真正のものとしてあるのではないか。つまり、それとの引き換えこそ、いま言ったすべてを差し出さねばならないものというのは、ただ「思慮（φρόνησις）」⁽⁵⁾のみがそれに相当するのではなかろうか。そして、この通貨と引き換えに、あるいはこの通貨、すなわち思慮を、ただひとつの基準として、それとともにすべてのものが売買されるならば、そのときにこそ、まさしく勇気と言い節制と言いまた正義という、一言にしていえば、「真実の徳（ἀληθὴς ἀρετή）」が生じてくるのだ。そしてその場合には、そこに快楽とか恐怖とかすべてそういった類いのものが、つけ加わろうが、あるいは取り去られようが、それは問題とならない。だがしかし、もしその思慮の所有とは関係のないところで、それらのもの同士が互いの間で交換されるとすれば、その時に生じる徳というのは、なにか影絵のようなものにすぎず、まことは奴隸的なものであって、いかなる健全さも真実さも、それ自身のうちに持ち合わせないものとなるだろう。ではひるがえって、真実のものはと言えば、そういうすべてのものからの浄化（κάθαρσις）として、節制にしても、勇気にしても、正義にしても、本来あるのではなかろうか。そして思慮（φρόνησις）とは、まさにそれ自身、浄化の目標となるもの（καθαρόμῃς）⁽⁶⁾ではなかろうか」『パイドン』69a6-c3

ここでソクラテスは、「真実の徳」とは本来「思慮」によって生じるものであり、「思慮の所有とは関係のないところで」生じる徳を「影絵のようなもの」と断じている。そして「思慮とは、まさにそれ自身、浄化の目標となるもの」とされるのである。まさにこのことを後に、プロティノスも(1.2.6.12)、ポルフュリオスも(32.55)語ったのである。

そして、「影絵のようなもの」である徳については、ソクラテスは以下の

ように言う。

T.18「それらの人たちのうちでは、最も幸福であり最上のところへ行くものと言え、それは「大衆的で市民的な徳 (τὴν δημοτικὴν καὶ πολιτικὴν ἀρετὴν)」⁽⁷⁾をおさめた者たちではないだろうか。つまりその徳というのは、ふつう世間で、節制とか正義とか呼ばれているものであり、知恵を愛し求めることや知性 (voûς)⁽⁸⁾ そのものはこれにかかわることなしに、ただ習慣や成熟から (ἐξ ἔθους τε καὶ μελέτης) 生じた徳のことを言うのだが」『パイドン』82a10-b3

ソクラテスは、生前の過ごし方に応じて、魂は身体の死後、善きところへ向かうものとそうでないものに分かれる、という物語を語る。上の引用で言われている「それらの人たち」とは、身体的な欲求から「浄化されていない魂 (αἱ μὴ καθαρῶς)」(81d3)を有する人のことである。そして、そのような状態でこの世をすごした人のうち、「最も幸福であり最上のところに行く」のが「大衆的で市民的な徳」をおさめたものだと言うのである。それは、「知性 (voûς)」にかかわることなく生じた徳であり、「習慣や成熟から」生じるのである。

他方、T.17の「真実の徳」を有する最善の魂が向かう最善の場所を、ソクラテスの語る物語は次のように説明する。

T.19「神々の種族の元にいたるのは、知恵を愛し求め、完全に浄化されて (παντελῶς καθαρῶ) この世を立ち去ったものでなければならないというのが神の掟であり、それは学びを愛し求める者以外には許されない」『パイドン』82b10-c1

「完全に浄化されている」とは、「身体に関するすべての欲望から離れている」(82c3) ことである。そしてそのような魂は、死後の物語では、「もし人

間の本性が観想すること（θεωροῦσα）に十分耐えられたなら、彼の地のものこそが真の天空であり、本当の光であり、真の大地であるのかを認識する（γινῶναι）だろう」（109e6-110a1）と述べられるのである。

そうすると、「完全に浄化されている」のは身体から離れた魂であり、真実を認識する「観想」もまた、身体から離れた魂の状態であることになる。この世で身体とともに過ごす魂は、まず「習慣や成熟から」獲得される「市民的徳」の状態にあるが、さらに「真実の徳」を求めて、知恵を愛し求めねばならない。「思慮との結びつき」によってこそ「真実の徳」になるからである。それが「浄化〔の過程〕」としてわれわれ身体的存在者に可能なあり方なのである。ソクラテスは「この言論が示す通り、「思慮」がわれわれのものになる時といえ、それはどうやらわれわれが死んだときにおいてであり、生きている間はないということになる」（66e2-4）と述べ、身体的存在者としての私たちのあるべき姿を、次のように続ける。

T.20 「われわれが生きている間は、思うに、万やむを得ない場合を除いては、できる限り身体と交じることなく、それと共同することなく、またわれわれが身体的な性に充たされることもなくして、むしろそれからの浄化の途をとりつづけ（καθαρεύωμεν）、かくして神みずからがこの絆からわれわれを最終的に解き放つ時をまつというのが、思うに「知ること（εἰδέναι）」に最も近接し得る途となろう」『パイドン』67a2-7

では、「真実の徳」の徳目はどのように説明されるだろう。先の T.17 で語られていた「市民的徳」としての「節制」「勇気」「正義」は、やがて『国家』において、魂の三分説をもとに、「知恵」によってそれらの本来のあり方が説明されることになる。それら「魂の理性的部分」に支配された徳こそが「真実の徳」であることは明らかであろう。それらはもはや「習慣や成熟から生じる徳」ではなく、「思慮・知性」を伴っているのである。「認識に近接

しうる途」において、「節度」や「勇気」が、それまでとは異なった形で現れるのである。

ではさらに、それぞれの徳の状態はどのようなものであろう。まず、「市民的徳」においては、T.17で語られる「感情」や「欲求」の交換とは、むしろそれらに「知」が支配されているあり方である。「奴隸的」という表現がこのことを端的に示している。

だが、以下で語られる「立派な人物」のあり方はどうであらう。

T.21 「「立派な人物 (ἐπιεικής) というものは」とはく (ソクラテス) は言った「息子を失うとか、その他何か自分が最も大切にしているものを失うとか、そういった運命を身に受けたとき、他のだれよりも平静にそれを耐え忍ぶだろうということ、ここまでのことは、あのときもたしか、われわれは言っていたはずだ」

「ええたしかに」

「いまはさらに、こういうことを考えてみようではないか。いったい、そういう人物は、何ひとつ悲しくない (οὐδὲν ἀχθέσεται) のだろうか。それとも、そういうことはありえないことであって、悲しみに耐えて節度を保とう (μετριάσει) としているのだろうか」

「実情を言えば、後者の方でしょう」と彼 (グラウコン) は言った」

『国家』 603e3-9

ここでは、「何ひとつ悲しまない」という、感情を排したあり方ではなく、悲しみに対する「節度」が求められている。メトリオパテイアという言葉は用いられていないが、その「立派な人物」のあり方を、身体的存在者である限りでの、「真実の徳」を有する者の状態と考えていいのではないか。

では最後に、「完全に浄化されている」状態はどうであらう。やはりアパテイアという言葉はでてこない。ただ、死後の世界において説明されるその状態は、「身体から離れている (χωρίς τοῦ σώματος)」(67a1) のであり、「魂

の身体からの解放、分離（λύσις καὶ χωρισμὸς ψυχῆς ἀπὸ σώματος）」（67d4-5）である。それはプロティノスやポルフュリオスの「〔魂が〕自分だけで活動すること」（p.8）、「魂だけで活動すること」（T.4）にあたる。そうであるなら、もはやいかなる感情も存在しないと考えるのが理にかなっていないのではなか。それもまた「真実の徳」の一つのあり方であろう。

3-1-2. 「神に似ること」

さて次に、プロティノスやポルフュリオスが議論していた「神に似ること」の由来も見ておかねばならない。それは、アパテイアと密接に関連する概念でもある。ここでは、はたしてソクラテスの語る「真実の徳」とは、「浄化の過程」であるのか、それとも「浄化の完成」であるのか、というまだ明確になっていない点を視野に入れつつ、「神に似ること」が語られる場面を取り上げることにしよう。

まず『テアイテトス』の中でソクラテスは次のように言う。

T.22 「悪く劣ったものがわれわれの住むこの場所を取り巻いて、われわれ死すべき本性のものについて回るといえるのはどうしても必然なのです。それだからまた、できるだけ早く、この世からあの世へと逃げなければならないということになるのです。そしてその世を逃れるとは、できるだけ（κατὰ τὸ δυνατόν）神に似ることなのです。そして似るとは、思慮ともに（μετὰ φρονήσεως）正しく敬虔になることなのです」『テアイテトス』 176a5-b3

プロティノスの T.6 ではじまる論文「徳について」は、まさにこの箇所への注釈とみなされている⁽⁹⁾。さらにまた、「新プラトン主義者たちに最もよく知られた個所」⁽¹⁰⁾とも言われている。だが、ここだけではなく、「神に似ること」は『国家』では以下のように語られる。

T.23 「では、正しい人について、このように考えねばならないでしょう。つまり、彼が貧乏になろうが病気になろうが、あるいはほかの世間で悪と思われているものに陥ろうが、それらのことは結局、この人にとっては、生きているうちにか、あるいはまた死んだ後にか、何か善いものになるのだ、と。というのは、正しい人になろうと心から切に望み、徳に励んで、人間に可能な限り (ὅσον δυνατόν ἀνθρώπῳ) 神に似ようと望む者が、神々によっておろそかにされることは、けっしてないのですから」『国家』 613a4-b1

T.22 では「思慮とともに」と、またこの T.23 でも「徳に励む」という言い方がされている。それらが「真実の徳」を指すことは、次の『ティマイオス』の文章からも明らかである。そこでは、「知性の働きを知性の対象に似せる」ことが「真の思慮」に励むことであると、次のように言われている。

T.24 「他方、学びへの愛と真の思慮 (τὰς ἀληθεῖς φρονήσεις) に真剣に励んできた人、自分のうちの何ものにもまして、これらのものを鍛錬してきた人が、もしも真実なるものに触れるなら、その思慮 (φρονεῖν) の対象が、不死なるもの、神的なものになるということは、おそらくまったくの必然事なのでしょう。さらにまた、こうした人が〔彼自身も〕、およそ人間の本性が持ちうる限りの (ὅσον δ' αὖ μετασχεῖν ἀνθρωπίνῃ φύσει)、最大限の不死性にあずかることになり、その点で欠けるところは少しも残さないということも、そしてまた、そのような人は、何分にも、つねに神的なものの世話を欠かさず、自ら、自分の同居者なる神霊を、よく整えられた状態で宿しているのだから、彼が特別に幸福であること (διαφερόντως εὐδαίμονα εἶναι) も、おそらく必然でしょう。・・・こうして知性の働きを知性の対象に似せて (τῷ κατανοουμένῳ τὸ κατανοοῦν ἐξομοιωσαί) ⁽¹¹⁾、前者を、その最初の本性の姿に返さなければなりませんし、また、このようにして似

せることによって、神々から人間に、現在に対しても後の時に対しても課せられた、最も善き生活（ἀρίστου βίου）を全うしなければならないのです」『ティマイオス』90b6-d7

「神に似ること」を求めるこれら三つの証言に共通してみられるのは、「可能な限り」（T.22）、「人間の本性が持ちうる限りの」（T.23）、「人間に可能な限り」（T.24）といった限定がなされている点である。たしかに「現在に対しても後の時に対しても」（T.23）や「生きているうちにか、あるいはまた死んだ後にか」（T.24）といった言葉からは、死後の世界への言及が見て取れる。だがあくまでも、重点が置かれているのは、身体を伴うこの世での生き方であり、「神に似ること」において求められる「真実の徳」は「浄化の過程」として理解するのが理にかなっているだろう。ソクラテスは、「浄化の完了」についてはほんの少し、死後の観想の可能性（p.18）を語るのみだからである。

以上、徳の序列をめぐるプラトンの考察をまとめると以下になるだろう。

- (1) 徳の序列に関する由来は、プラトンの「市民的徳」と「真実の徳」の区別にある。
- (2) しかしプラトンが「真実の徳」を「浄化の過程」として強調している点で、「浄化の完了」を重視したプロティノス [Plō.3] やボルフェリオス [Por.3] とは異なる。
- (3) プラトンは「浄化の完了」の後の「観想」については物語を語るのみである⁽¹²⁾。
- (4) メトリオパテイアとアパテイアという言葉は見いだせないが、「真実の徳」が現世において可能とするのが前者であり、来世において獲得されるのが後者である。

プラトンの徳

	感情のあり方	知のあり方
「市民的徳」 [Pla.1] 「奴隷のようなもの」 T.17	感情と感情を取り換える T.17	「思慮とは無関係」 T.17 「哲学や知性と無関係」 T.18 「習慣と成熟による」 T.18
「真実の徳」 [Pla.2] 「浄化」 T.17 「浄化の道を取り続ける」 T.20	「節度を保つ」 T.21	現世において知を愛し求める 「エイデナイ（知ること）に近接する」 T.20
「真実の徳」 [Pla.3] 「浄化の目標」 T.17 「完全に浄化」 T.19	「身体からの分離」 p.20	死後、観想により真をグノーナイ（認識）する 109c5-p.18

3-2. アリストテレス

3-2-1. 「観想的徳」の由来

では、ポルフェリオスが語る「観想的徳」の由来を、「観想」についてより多くを語っているアリストテレスから探ることにしよう。アリストテレスは、「観想的な生活」を「最も完全な幸福（*ἡ τελεία εὐδαιμονία*）」（1177a17）とみなし、しかもそれをわたしたちの「生活（*βίος*）」の中で論じた。その際「観想的な生活」と対比されるのが「市民的な生活」である。

アリストテレスは『ニコマコス倫理学』において、「幸福であること（*εὐδαιμονεῖν*）」を「よく生きることであり、よく行為・実践することである（*τὸ δ' εὖ ζῆν καὶ τὸ εὖ πράττειν*）」（1095a19）と考えることは、大衆にも知者にも共有されているとして、それを出発点に幸福の内実を探求していく。そして、第一巻第五章で、人間の「生活」を次のように三つに分類する。

T.25 「世間一般の多くの人たちは、彼らの生活から考えると当然のこ

とだが、善、すなわち幸福とは快樂のことだとみなしているように思われる。それゆえ彼らはまた、「享樂の生活（τὸν βίον ἀπολαυστικόν）」を愛好するのである。このように言ったのは、生活の種類には、いま挙げられたもののほかに、「市民的・政治的（πολιτικός）な生活」、そして第三に「観想的な生活（θεωρητικός）」という、およそ三つの主要な類型がある」『ニコマコス倫理学』 1095b14-19

この引用文をもとに、言葉つかいについて注意をしておきたい。本稿では、ポルフェリオスによる「市民的徳」と「観想的徳」の区別、序列を考察の出発点とした。上の T.25 はその区別の源ともとれるものである。しかしながら、アリストテレスはそれらの言葉をほとんど使わない⁽¹³⁾。議論の中でアリストテレスは、「市民的に生活」において求められる徳、「観想的な生活」において求められる徳を、それぞれが一体どのようなものであるかを探求するのである。それらを見定めることにしよう。

アリストテレスは、倫理学は「人間にとっての善（τὸ ἀνθρώπινον ἀγαθόν）」（1094b7）を目指すべきであると、繰り返し主張する。それは、「人間が獲得しうる善であり、行為・実践しうる善（τὰ κτητὰ καὶ πρακτὰ τῶν ἀγαθῶν）」（1097a1）である。そしてアリストテレスは、人間の「幸福」の探求は、「人間の機能が把握されれば達成できる」（1097b24-25）とし、その機能のよさ、すなわち「徳」の考察へと移っていく。その際、身体ではなく魂の機能に着目したアリストテレスは、魂のうちの「理性を持つ部分、その部分によるある種の行為・実践的生（πρακτική τις τοῦ λόγου ἔχοντος）」（1098a3-4）こそが人間独自のものであると主張する。さらにそれは、「理性に従うという意味で理性をもつ部分」と、「自ら理性を持つ部分」に分けられる。前者が魂の「欲求的部分」、後者が厳密な意味での「理性的部分」である。そしてそれぞれの機能のよさが、「性格の徳」と「思考の徳」として明らかにされるのである。このようにして、「幸福とは、徳にもとづく魂の活動である」（1098a7）という結論に至る。そのうえで、複数の「徳」が存在することをみこして、

アリストテレスは次のように主張する。

T.26「人間にとっての善とは徳にもとづく魂の活動である。またもし、徳が複数あるならば、その中の最善の、最も完全な徳（τὴν ἀρίστην καὶ τελειοτάτην）に基づく活動である、ということになるだろう」『ニコマコス倫理学』1098a16-17

そして『ニコマコス倫理学』の続く議論で、アリストテレスは「性格の徳」として「正義」「勇気」「節制」「高邁さ」「気前の良さ」など、多くの徳目を挙げ、「思考の徳」としては「学問的知識」「知性」「知恵」「思慮」「技術」という五つの徳目を挙げる。それらに関する長い議論を終えた後、最終的には、先の引用 T.25 で語られていた第三の生活、すなわち「観想的な生活」が「完全な幸福（ἡ τελεία εὐδαιμονία）」（1177a17）であるということが、第十卷第七章で示されることになる。

T.27「幸福が徳にもとづく活動であるとすれば、その活動とは、最もすぐれた徳（τὴν κρατίστην）にもとづくものであると考えるのが、理にかなっている。しかるに、最もすぐれた徳とは、最善のものの徳であらう。したがって、その際そのものが知性（νοῦς）であるにせよ、他の何かであるにせよ、このものこそ、それ自体も、また神的なもの（θεῖον）であるがゆえに、あるいは、われわれのうちにあるものの中で最も神的なものであるがゆえに、自然本性にもとづいて、支配し、導き、そして美しく神的な物事について思いをめぐらす、と考えられるところのものだが、このような最善のものが、それに固有の徳にもとづいて行う活動こそ、完全な幸福（τελεία εὐδαιμονία）であるだろう。ところで、この活動が観想活動（θεωρητική）であることは、すでに言われていた」『ニコマコス倫理学』1177a12-18

このようにして、アリストテレスの「人間にとっての善」についての探求は、神的な活動としての「観想」にたどり着いたのである。

3-2-2. 「観想的な生活」の徳と「市民的な生活」の徳

アリストテレスは先の T.27 の後、「しかしながら、他の徳（τὴν ἄλλην ἀρετήν）にもとづく生活も、二次的な（δευτέρως）幸福である。なぜなら、そうした徳にもとづく諸活動は人間的なもの（ἀνθρωπικαί）だからである」（1178a9-10）と考察を続ける。その活動は T.25 の「市民的な生活」における徳に従ったものである。「観想的な活動」を行う「知性」が「神的なもの」と語られているのとは対比的である。その対比に注目しながら、二つの徳をさらに見ていくことにしよう。

まず、「観想」が「神的なもの」であることを、アリストテレスは次のように言う。

T.28 「こうした活動はしかし、人間の次元を超えたものであるかもしれない。というのは、人がそのような仕方では生活できるのは、彼が人間であるかぎりにおいてではなく、彼のうちに何か神的なものがそなわっているかぎりにおいてだからである。そして、この神的なものが複合的なものに優っているだけ、それだけその活動もまた、他の徳にもとづく活動よりも優っているのである。したがって、もし知性（νοῦς）が人間と比べて神的であるならば、知性にもとづく生活もまた、人間的な生活と比べて神的なのである」『ニコマコス倫理学』1177b26-30

「観想」とは、知性が「他の仕方でありえないもの」である真理を、ただただ眺めることなのである。「知性の徳は複合的なものから分離された徳である（ἡ δὲ τοῦ νοῦ κεχωρισμένη）」（1178a22）と言われるように、その「知性」

は身体とは離れている。ただ、アリストテレスは、この「知性」については、「ここでのわれわれの課題を超える」(1178a23)と述べ、これ以上は語らない。けれども内容的には、ポルフェリオスの「観想的徳」[Por.3]の由来をこの、アリストテレスの言う「最善の徳」である「知性の徳」に見て取ることとはできるだろう。

他方、「人間的」と言われるのは、それらの徳が身体を伴う人間の行為や感情にかかわるものだからである(1104b14)。すなわち、先に言われた「他徳」とは、さしあたり「性格の徳」を指している。『ニコマコス倫理学』の大半は、「性格の徳」についての説明に費やされ、さらに「市民的・政治的なこと」を議論する『政治学』へとアリストテレスの考察は続いていく。それもまた「人間の事柄に関する哲学」(1181b15)と言われるのである。

さて、今度はそれぞれの徳の状態を確認しておこう。まず、観想を行う「知性の徳」であるが、身体と「複合的なものから分離している」とは、先にプラトンが同じく「身体からの分離」(67d4-5)と語っていたような、魂単独のあり方と考えていいだろう。その魂の状態は、言葉として語られることはないが、感情のない状態(アパテイア)と考えられるだろう。

他方、「二次的な幸福」を可能にする「性格の徳」は、まさに「感情に節度を与えること」と言える。アリストテレスは「中間が最善である」と述べ、それを「節度ある(μέτριος)」⁽¹⁴⁾という言葉で説明している。たとえば、快樂に対して「中間」を保っている節制ある人は、快樂を「節度をもって(μετρίως)、しかるべく楽しむ」(1119a17)人のことであり、総じて「性格の徳」を持つ人は、「節度ある態度をとる(μετρίως ἔχει)」(1124a15)ことができるのである。そしてそれは「習慣によって(ἐξ ἔθους)生じる」(1103a17)のである。だがここでも「思考の徳」は重要な役割を担っている。というのは、その都度の「感情」や「行為」の中間を見定めるには、それを「知る」ことが必要となるからである。それがアリストテレスの言う「思慮」の役割である。「[人間の]機能は「思慮」と「性格の徳」に基づいて果たされる」(1144a6-7)のである。

さて、「市民的な生活」の徳と「観想的な生活」の徳を対比的に考察してきたが、少し整理をしなければならない。なぜなら、前者に「性格の徳」が、後者に「思考の徳」が単純に振り分けられるのではないからである。それをはっきりさせるために、「思考の徳」の五つの徳目をあらためて確認しておこう。

アリストテレスは『ニコマコス倫理学』第六巻で、魂の理性を持つ部分の徳である「思考の徳」をさらに、「他の仕方でありえない諸原理を持つもの」を対象とし、それについての「知」にかかわるものと、「それ以外の仕方でありうるもの」を対象とし、それについての「知」にかかわるものの二つに区別する。そして五つの徳目のうち、前者には「論証にかかわる状態」（1139b31-32）である「学問的知識（ἐπιστήμη）」と、「第一の諸原理」（1141a8）を対象とする「知性（νοῦς）」と、「知性と結びついた学問的知識であり、最も尊い諸存在」（1141a19-20）を対象とする「知恵（σοφία）」が属し、後者には「人間にとっての善悪にかかわる行為」（1140b5-6）を対象とする「思慮（φρόνησις）」と「制作」（1140a10）にかかわる「技術（τέχνη）」が属している。

これらの「知」の区別をこれまでの議論にてらしてみると、まず「観想的な生活」では「知性」が主として語られていたが、T.27において「知性であるにせよ、他の何かであるにせよ」と述べられていたとおり、「知恵」という徳もそこには含まれていると考えられる。それが「最も貴重な存在」を対象とすると説明されていることから明らかである。他方、「市民的な生活」において重要なのは「思慮」であることもよりはっきりとするだろう。さらに、後のプロティノスやポルフェリオスの議論が、このアリストテレスの区別に基づいていることも見て取ることができるであろうし、ひょっとすると、ソクラテスが「真実の徳」として語った「思慮（φρόνησις）」の実践的な役割をもとに、アリストテレスが術語化したのではないか、といった推測も可能になるかもしれない。

以上を踏まえると、正確には、「市民的な生活」の徳とは「性格の徳」と

「思考の徳」のうちの「思慮」が、「観想的な生活」の徳とは、「思考の徳」のうちの「知性」とさしあたり「知恵」が該当するのである。二つの徳の由来に関してまとめておこう。

- (1) 「観想的徳」[Por.2] [Plo.3] の由来はアリストテレスの観想活動を行う「知性の徳」にある。アリストテレスは「最善の徳」と呼んでいる。
- (2) 「市民的徳」の由来はアリストテレスの「市民的な生活」において求められる「性格の徳」と「思慮の徳」にある。
- (3) それらを「神的な生活」と「人間的な生活」と対比させている。
- (4) それらの状態はアパテイアとメトリオパテイアに該当する。

アリストテレスの徳

	感情のあり方	知のあり方
「市民的な生活」の徳 [Ari.1]	「中間」	「思慮ある人が中間を規定する」
「性格の徳」 + 「思慮の徳」	「節度ある態度をとる」	1107a1
「行為にかかわる徳」 1177b5	1124a15	「習慣によって生じる」
「他の徳」 1178a9		1103a17
「観想的な生活」の徳 [Ari.2]	「複合されたものからの分離」	知恵に基づく活動 1177a25
「知性の徳」 1178a22	1178a22	「自分だけで観想する」 1177a30
「最善で最も完全な徳」 T.26		知性の活動 1188b18

第4章 二つの学派の合流

4-1. ペリパトス派

では、アリストテレスはこれら二つの徳の関係性について、さらには序列に関してどのように考えていたのか。アリストテレスは『政治学』第七巻で、次のような問いをあげている。

T.29「しかしながら、徳をともなう生が最も選択すべき生活であることに同意する人たちの間に、はたして、市民的で実践的な生活（ὁ πολιτικός καὶ πρακτικός βίος）（国家に参加し、実践に身を投じる生）が選択されるべきなのか、それともむしろすべての外的なものから解放された生、たとえば観想の生活（θεωρητικός）が——ある人たちの言うところでは、これのみが哲学者にふさわしい生活であるとのことであるが——選択されるべきなのか、という論争がある」『政治学』1324a25-29

さて、これからの考察のために用語について確認しておきたい。それは、アリストテレスが上の T.29 で「市民的」と「実践的」とを並列して語っているように、彼以降の論争では、「市民的」と「観想的」との対比が、「実践」と「観想」との対比として語られるようになった点である。以下、「実践的」という言葉が多く出てくるが、それは「市民的」とほぼ同義である。

では本論に戻ろう。ここで、アリストテレスが「論争がある」と述べているように、二つの徳の問題は彼以前から議論されていたようである⁽¹⁵⁾。そしてこの問いに続くアリストテレス自身の考察は、双方への批判を述べ、かつ双方の主張を両立させるような形で展開され、明確に一方を他方に優先させる形での結論に至っていない。「いずれの側の議論も一面においては正しいが（τὰ μὲν ὀρθῶς）、他面においては正しくない（τὰ δὲ οὐκ ὀρθῶς）」（1325a23-24）というのがアリストテレスの結論である。というのは、自由人として実践から解放され観想に集中できるのはよいことであるが、幸福が実践であるなら、正しい人や節制ある人の実践はよいことの成就と考えられるからである。そしてまた、「実践」から「観想」へ、といった連続性も示されていない。そのことが理由であろう。アリストテレスに続くペリパトス派において、幾人かの後継者たちがこの「実践か観想か」という問いに言及している。それを覗き見ることにしよう。

4-1-1. アスパシオス

まずは、紀元後二世紀前半に活躍したとされるアスパシオスを取り上げることにする⁽¹⁶⁾。彼は、『ニコマコス倫理学』全十巻のすべてに注釈を書いたとされるが、残っているのは、第一から四巻、第七、八巻への注釈のみである⁽¹⁷⁾。アスパシオスは第一巻への注釈の前に、短い序論を述べており、そこで最初に語られるのがこの問題である。彼は次のように始める。

T.30「性格にもとづく実践、とくに市民的な実践は、それが必要不可欠である点から（κατὰ μὲν τὸ ἀναγκαῖον）すると、観想的な哲学よりも「先なるもの」であるが、尊さという点から（κατὰ δὲ τὸ τίμιον）すると「後なるもの」である」『アリストテレス「ニコマコス倫理学」への注釈』 1.2-4

アスパシオスは上に続けて、「市民的な実践」とは、「魂の感情を一定の節度ある状態に整える（εἰς συμμετρίαν τινὰ τὰ τῆς ψυχῆς πάθη καταστήσαντας）」（1.5-6）ことであり、それなしに「よく生きることは不可能」であるがゆえに、「市民的で性格にかかわる哲学が必要である」（1.6）と主張する。実践的な哲学は「必要性」という点で、「より先なるもの」なのである。では、なぜそれなしに幸福となれないのか、アスパシオスは次のように説明する。

T.31「もしわれわれが身体なしに存在するなら、われわれの自然本性は観想以外の何も仕事とする必要はなかったであろう。だがげんに、身体は自然本性は必然的に、身体的な快楽や苦痛と結び付けられており、われわれに節度、忍耐、あるいは他の多くの徳を配慮するようしむけるのである」『アリストテレス「ニコマコス倫理学」への注釈』 1.14-18

以上のように、アスパシオスは身体にかかわる徳目として「節度」「忍耐」を語り、さらには「正義」「思慮（φρόνησις）」（2.1）を取り上げている。

他方、アスパシオスは「観想」については次のように語る。

T.32「知恵（σοφία）は、最も尊いもの、最も神的なものに関わり、自然の仕事を観想し（θεωρεῖ）、ついで自然によって結合されているものよりもはるかによく美しいものを観想する。それらは第一哲学が観想するものであり、その点で観想（理論）哲学は「より先なるもの」、「より尊いもの」といわれるのである」『アリストテレス「ニコマコス倫理学」への注釈』1.8-11

「知恵」という「思考の徳」の働きとして「観想」が語られているが、先に挙げたアリストテレスの区別にそくした説明である。ここでは、アスパシオスが「必要性」や「尊さ」といった観点ごとに「市民的徳」と「観想的徳」の序列を論じていることを、まず何より指摘しておきたい。

ところで、アスパシオスはアリストテレスの語る「完全な徳」という言葉に注目し、二つの徳の説明を試みている。つづいてそれを見ることにしよう。すでにT26でみたように、アリストテレスは『ニコマコス倫理学』第一巻で「完全な徳」というものを語っていた。さらにアリストテレスはやがて第十巻で、完全な徳に従う活動こそが「完全な幸福」（T.27）であり、それこそが「観想」であると言う。アスパシオスは、アリストテレスの語る「完全な徳」を、「実践的な徳と観想的な徳のすべてからなる徳である」（8.26-27）と理解する。その根拠として、アリストテレスの「幸福な人はつねに、あるいは何にもまして徳に基づく行為・実践をし、観想をするだろう」（1100b18-19）⁽¹⁸⁾という言葉を引き合いに出しながら、アスパシオスは「ここでは明らかに、実践と観想の両方をアリストテレスは目標にしている」（29.28）と主張する。そして、アスパシオスの解釈によれば、「市民的な生活」を可能にするところの「性格の徳」も「思慮の徳」も、いまだ「観想」に達してい

ないという点で「不完全な徳」であることになる。では、両者からなる「完全な徳」は、どのように説明されるのか。アスパシオスは次のように言う。

T.33「次のことは覚えておかねばならない、すなわち、アリストテレスは、正しいことわりに従った実践は、完全な徳を所有している人だけにではなく、その徳を所有していない人にも帰属させている、ということである。というのも、後者の人たちは、正しいことわりが指示する通りに、行為・実践するのであるが、それについての論証されたことわりを所有しているのではなく、むしろ、何をなすべきか何をなすべきでないかについての信念としてのことわりを所有しているのである。言わば、彼らは「事実」を把握しているが「何ゆえ」を知らないのである」『アリストテレス「ニコマコス倫理学」への注釈』40.10-15

アスパシオスは「正しいことわりは思慮（φρόνησις）である」（40.8）というアリストテレスの言葉に着目し、以上のことを語っている。そしてアスパシオスは、その「思慮」は、論証にかかわる「思考の徳」である「学問的知識（ἐπιστήμη）」を所有していないという点で「不完全な徳」である、と解釈するのである。

たしかに、アリストテレスは「知性」だけでなく、いくつかの「思考の徳」に「観想」との関連を示唆していた（T.27）。そうすると、「学問的知識」を「実践」と「観想」をつなぐものとして理解することができるかもしれない。しかしながら、「市民的徳」と「観想的徳」の双方からなる「完全な徳」というアスパシオスの解釈は、「思慮」を欠いた「観想」という、また別の「不完全な徳」の可能性も生じるであろう⁽¹⁹⁾。「複合されたものからの分離」として「観想」が語られる場合、身体にかかわる徳が不必要となるのは、けっして「不完全」なことではないように思われるのである。

4-1-2. アフロディシアスのアレクサンドロス

つづいて、紀元後二世紀から三世紀に活躍し、ペリパトス派の学校で公開の講義をおこなったとされるアフロディシアスのアレクサンドロスの議論を取り上げよう。彼は「アリストテレスの注釈者」と呼ばれるようになり、現在でも多くの注釈書が伝えられている⁽²⁰⁾。だがそこに『ニコマコス倫理学への注釈』という名の書はない。しかし『トピカへの注釈』の中で、二つの徳の状態をめぐる、アレクサンドロスは次のように語っている。

T.34「比較検討されているもののうち、一方は可能なものであり、他方は不可能なものである。しかるに、可能なものは不可能なものよりもいっそう選択されるべきである。たとえば、人間にとって長生きは可能であるが、不死は不可能であるのだから、人間にとっては不死よりも長生きが選択されるべきである。したがって、アパテイアよりもメトリオパテイアが選択されるべきである。というのは、不死とアパテイアが選択されるべきなのは、より善き存在によって、すなわち神によって選ばれるべきものだからである」『アリストテレス「トピカ」第八巻への注釈』 239.6

アレクサンドロスがこれを語るのは、アリストテレスが「示されているあらゆる問題について、通念に基づいて推論することができる方法を見出すこと」(100a18-20)を目的に論述した『トピカ』への注釈においてである。アリストテレスは、推論で「いずれがより望ましいか、あるいはいずれがより善いか」(116a3)を考察する際には、様々な方式のもとで議論しなければならないと主張する。その中で「可能な事柄は不可能な事柄よりも望ましい」(116b26)という一つの方式を挙げる。その個所への注釈である。

この T.34 は大きな注目に値するだろう。まずは、それはメトリオパテイアとアパテイアとの対比が、言葉として明確に語られている点である。すで

にアリストテレス自身の考察を行った際に、「性格の徳」においてメトリオパテイアに該当する状態が語られていること、「観想」が身体から離れた活動であるがゆえに、実質的にはアパテイアに該当するであろうことを見た。それらがペリパトス派において明確に概念化されていることを T.34 は示している。

さらにもう一点、それら二つの徳の状態が、「可能性」という観点のもとで序列化されていることにも注意をしておきたい。先にアスパシオスにおいて二つの徳の関係が語られたときにも、単なる優劣ではなく、「必要性」や「尊さ」という観点のもとで、序列が示されていた。ひょっとするとこれらの論じ方は、当のアリストテレスが『政治学』で見せていた、「一面では (τὰ μὲν)、他面では (τὰ δὲ)」(p.30) という論述を源とするのかもしれない。

では、論理学の方式に当てはめる事例としてではなく、まさに倫理学の問題として、アリストテレスの二つの徳を、またそれらの幸福との関係を、アレクサンドロスはどうに理解しているのであろうか。アレクサンドロスに帰される『倫理学の諸問題』という小作品が伝えられている⁽²¹⁾。その書の第 25 問題は「徳の発見と確立に関する要約」である。そこでは明らかに『ニコマコス倫理学』をもとに、アリストテレスの徳についての考え方が要約されている。

アレクサンドロスは、まず「実践」に関して、「性格の徳」は「感情と実践の節度 (συμμετρία) のうちに成立する」(149.32) として、具体的には「勇気」「節制」を、さらには「思慮」との関連を示す。他方、「観想」に関しては、「永遠に存在するものについての認識であり、そういったものについての真理を認識することがその徳である」(149.12-13) と言う。そして、アレクサンドロスは、この「永遠なものの認識」を「学問的知識の徳」(151.4) による活動とみなし、加えて、「第一の(原理についての) 認識と発見」(151.8) である知性の活動と、「原理の発見と原理にしたがってそこから導き出された発見の両方を指す」(150.9-10) 知恵の活動が幸福を構成する最も重要な部分をなしているとして、次のように言う。

T.35「それら思考の徳は、いま述べられた活動においてよき発見と探究を行うものであり、幸福をともに完成させる最も重要な部分（τὸ κυριώτατον τῆς εὐδαιμονίας συντελείας）である。思考の徳は、理性的な魂が有する最大の能力をそれらとともによく活動させるのである」『倫理学の諸問題』 151.10-14

では、「幸福の他の部分」は何なのか。アレクサンドロスは「欲求的魂に関する幸福の部分（τὸ κατὰ τὴν ὀρεκτικὴν ψυχὴν εὐδαιμονίας μέρος）は、感情や行為・実践に関する徳によってよく生じる活動のうちに存する」（150.10-12）と主張する。すなわち、「性格の徳」によって保たれる状態であり、先に示したように、それは「感情と実践の節度のうちに成立する」（149.32）のである。では、ここで語られている「幸福の部分」という考え方をどのように理解すればいいであろう。

ただちに思い浮かぶのは、二つの部分からなる全体が「完全な幸福」を成り立たせる、という、アスパシオス的な考え方であろう。実際、アレクサンドロスは『倫理学の諸問題』では全体と部分という関係性を論じている。また、『トピカへの注釈』ではアスパシオスと同様に、「完全な徳」と「不完全な徳」という区別に言及してはいる。だが、それは、『ニコマコス倫理学』第五巻で論じられている「合法性」としての「正義の徳」が、他者との関係で、他の「性格の徳」を内に含んでいるという意味での「完全な徳」（1129b26）であり、「市民的徳」と「観想的徳」を包括するという意味での「完全な徳」ではない。すると今ここで言えることは、アレクサンドロスにおいては、「幸福をともに完成させる」という点で、「観想」が「市民的な実践」よりも上位に置かれている、つまり序列化されている、ということであろう。

さて、これら二人のペリパトス派の証言から見て取れるのは、一つの明確な形で「実践」と「観想」の序列が示されているのではない、ということである。一方で、現世における必要性、可能性という点でメトリオパテイアが

重視され、他方、尊さや、幸福の完成という観点ではアパテイアが重視されているのである。そしていずれも、「人間にとっての善」の探求を強調したアリストテレスの立場と、また神的な活動を重視したアリストテレスの立場とを、それぞれ引き継いでいると言えるだろう。そして、ひょっとすると、ストア派を相手にした「メトリオパテイアかアパテイアか」という論争では、「人間にとっての善」という立場がより強調されることになったのかもしれない。それは、同じくストア派との対決を通じて、独自のアパテイア概念、およびその重視にたどり着いたプロティノスとは対比的である。

4-2. プラトン主義

4-2-1. ポルフェリオス再び

前節では、ペリパトス派の二人の証言をもとに、メトリオパテイアとアパテイアが、いくつかの観点ごとに序列化されているのを確認した。ところが実は、彼ら二人と新プラトン主義との接点は、最初に取り上げたポルフェリオスによって証言されているのである。彼は『プロティノス伝』の中で、師プロティノスの行った講義について次のように報告している。

T.36「講義では注釈書が彼（プロティノス）の前で読まれた。クロニオスの、ヌウメニオスの、ガイオスの、アッティオコスの、またペリパトス派からはアスパシオスの、アレクサンドロスの、アドラストスの、その他、手当たり次第のものが読まれた」『プロティノス伝』14.10-14

最初の四人はプラトン主義者と伝えられている⁽²²⁾。そして彼らの後に、前節で取り上げたアスパシオス、アレクサンドロスの名が挙げられているのである。そうだとすると、プロティノス自身が、また彼の講義を聞いた人たちがアリストテレスから何らかの影響を受けていたことは疑いえないだろ

う。そしてこのように述べるポルフェリオス自身も「プロティノス以後の新プラトン主義者の中でアリストテレスの著作に最初の注解を行ったと目されている」⁽²³⁾のである。また、「ポルフェリオスは、プラトンとアリストテレスとが思想的に調和しているという想定を初めて明確な形で表明した」⁽²⁴⁾なのであれば、二つの徳の関係、序列という点でも、プラトンとアリストテレス両者の、さらにはそれぞれの学派の合流点として、ポルフェリオスの思想を理解することができるだろう。

4-2-2 中期プラトン派

いま述べた点を確認するために、プラトン主義の流れを見ておきたい。ポリュプリオスがT.36で挙げているプラトン主義者たちに関しては、何人かが著作を残したと伝えられているが、残念ながら、今日に伝えられるものはほぼない。そこで、前回の論文でも取り上げたアルキノオスの『プラトン哲学講義』を手掛かりとする。アルキノオスは紀元後2世紀に生きたと推測され⁽²⁵⁾、その著作は「プラトンの最も主要な教説」(1.1.1)を叙述するものである。そこにおいて、「観想」と「実践」は次のように定義される。

T.37「観想とは、知性的なものを知性によってとらえる知性の活動（ἐνέργεια τοῦ νοῦ νοοῦντος τὰ νοητά）であり、実践とは、身体を通して実現される理性的な魂の活動である。そして魂は、神的なものや神的なものの知性（νοήσεις）を観想することで、善き状態にある（εὐπαθεῖν）と言われ、魂のその状態が思慮（φρόνησις）と名づけられている。そして、それこそ「神的なものに似ること（θεῖον ὁμοίωσις）」と言ってもいいのかもしれない。それゆえ、そのような魂の状態は、第一義的で尊いもの（προηγούμενον καὶ τίμιον）でもあり、最も願わしい最も本来的なものでもあって、また何ものにも妨げられることのない、われわれ次第のもの（ἐφ' ἡμῖν）、そしてわれわれに課

せられた目的を達成する原因ともなるものであろう」『プラトン哲学講義』2.2.1-8

ここでの対比は、『ニコマコス倫理学』で語られるアリストテレスのそれを思い起こさせる。それと同時に、観想が「思慮（φρόνησις）」と呼ばれていることや⁽²⁶⁾、「神的なものに似ること」といった表現は、プラトンからの影響だと思われる。さらにはストア派の用語なども見いだされ、まさに「折衷主義」と呼べる典型的な証言といえるだろう。その中で注目したいのは、「われわれに課せられた目的を達成する原因」として「観想」が位置づけられている点である。アルキノオスは続ける。

T.38「それに対して、実践や実践にかかわる事柄は、身体によって実現を妨げられることもありうるし、また、観想的な生活においてみられたものを人間の性格に配慮することを事柄が要請する場合には、実践されることもあるだろう」『プラトン哲学講義』2.2.8-11

何よりもまず、T.37の「第一義的で尊いもの」といった言葉などから、「実践」に対する「観想」の優位を見て取ることができる。アルキノオスは、哲学を「魂の身体からの解放であり、向け変えである」（1.1.2-3）と言う。ただし、「実践」から「観想」へという一方的な方向性ではない。T.38の「観想的な生活においてみられたものを人間の性格に配慮する」と述べているように、「観想」にとどまり続けることをアルキノオスは考えていないのである。ここには、しばしば指摘されるように⁽²⁷⁾、『国家』の洞窟の比喩で語られる哲学者のあり方が示されていると言えるだろう。つまり、「観想」のあとの「実践」をアルキノオスは語っているのである。それらはともに「幸福」を成り立たせる本質的な要素と言えるだろう⁽²⁸⁾。

もちろん、アルキノオスは「最終の目的は神に似ることになるだろう」（28.3.7）と述べ、「観想」の優位を主張する。そして「魂の完全な最もすぐ

れた状態」(29.1.2)である「徳」に関しては次のような区別をする。

T.39「さまざまな徳のうち、あるものは第一義的な徳であり、あるものは従属的な徳であると考えねばならない。すなわち、理性的な部分のうちに備わる徳が主導的な徳であって、それによってそれ以外の徳もまた完全になるのであり、感情的な部分のうちにそなわる徳が従属的な徳である」『プラトン哲学講義』30.3.1-4

ここで「感情的部分にそなわる徳」と言われているのは、「節度ある感情」(30.5.7)を可能にするものである。そしてそれらを「完全にする」のが「第一義的な徳」であり、T.37でみたように、アルキノオスの場合、それを「思慮」と呼ぶのである。そして、その「思慮」が「観想」ととどまることなくふたたび「実践」に関与する場合、そこで成立する「勇気」「節制」「正義」は、「相互に随伴する」(29.3.10)のである。というのは、「さまざまな徳は完全なものである限り、互いに切り離されない」(29.4.11)からである。T.38で言われていた「観想的な生活においてみられたものを人間の性格に配慮することを事柄が要請する場合には、実践されることもあるだろう」とは、それらの徳に基づく行為と言えるだろう⁽²⁹⁾。またT.37で「われわれに課せられた目的を達成する原因」として「観想」が位置づけられていた理由もここにあるだろう。

4-2-3. プロティノス再び

最後に、プロティノスの論文4.8「魂の身体への降下について」をとりあげ、観想と実践の双方向的なあり方を確認しておきたい。プロティノスは自身の合一体験と、再びの降下について次のように述べている。

T.40「私はしばしば身体から脱して、自己自身に目覚め、他のすべて

のものから脱却してわたし自身の内部へと入り込み、ただただ驚嘆すべき素晴らしい美を見ることがあるが、この時ほど、自分が高次なるものの一部であることを確信したことはなかった。その時の私は最善なる生として活動し、神的なものと合一し、その中に自らの居場所を与えられ、あの最善の生命活動を通して他のいっさいの知性的なものを超えたところに自らを据えていたのである。このようにして神的なものの中で安らぎを得た後に、知性の領域から理性的な領域に降下してきて、「今はどうして身体の中に」と思い惑うのである」4.8.1.1-11

ここで語られているのは「一者」との合一であり、「いっさいの知性的なものを超えた」あり方であるが、いまは「身体から」脱して、再び「身体へ」という点に注目したい⁽³⁰⁾。プロティノスは「最善なる生として活動」した後、身体的存在者にもどり「思い惑う」と言う。しかしながら、ひとたび知性を「観想」したことで、さらには一者との合一を経験したことで、「自分の後にあるものを秩序づけ、管理し、これを支配する」(4.8.3.27) ことができるのである。つまり、「観想」のあとの「実践」は、「より高次な徳」による支配が継続していると言えるだろう。それゆえに、「その魂は感性界を脱して再び知性界へと戻っていくことができる」(4.8.7.11) と、プロティノスは主張するのである。

まとめと仮説

では、これまでの考察を振り返りながら、ある仮説を示しておきたい。本稿は、ポルフェリオスにおいて明確に語られている「市民的徳」と「観想的徳」の序列、ならびにそれらの徳の状態であるメトリオパテイアとアパテイアの序列を出発点とし、それがどのような由来をもち、またどのような経緯をへたものであるかを順にみてきた。そして、プラトンによる「市民的徳」と「真実の徳」の区別と、アリストテレスによる「市民的な生活」と「観想

的な生活」の区別が由来であることが示された。そのさい、プラトンにおいては、すでに明確な序列が語られていたのに対して、アリストテレスにおいては、両者の生活、ならびにそこで必要されるそれぞれの徳がともに重視されていた。さらには、後に続くプラトン主義では、プラトンの立場が基本的に踏襲され、「神に似ること」という象徴的な言葉によって「観想的徳」がより重視されるようになった。他方、アリストテレスの学派では、観点の違いのもとで序列が示され、それぞれの徳の優位性が観点ごとに異なることが示された。このことに関しては前論文も踏まえると、ペリパトス派では「人間にとっての善」という観点がストア派との論争では強調され、メトリオパテイアが学派の立場になった、と言えるだろう。それはともあれ、プラトン主義とペリパトス派それぞれの立場は互いに影響を与えあったと思われる⁽³¹⁾。「観想」のあとの「実践」がプラトン主義では語られるようになり、ペリパトス派では「観想」による「最善の幸福」が強調される場面も見られたのである。概念の揺れや変化なども含めて、「折衷主義」と称される姿がそこにはあった。

では、以上を踏まえてポルフュリオスの序列に立ち返った場合、そこで「観想的徳」が「市民的徳」の上位に置かれるのは、当然のことと言えるのではないか。一つには、由来としてのプラトンがまさにそうだったからである。そしてもう一つ、ペリパトス派との関係においてみても、観点によっては、すなわち「尊さ」という観点のもとでは、「観想的徳」の優位性が示されてもいたからである。そうすると、『知性的なものへの飛躍台』を著し、より上位の存在への帰還を主張する新プラトン主義にあっては、その観点が重んじられ、他方「必要性」や「可能性」というペリパトス派で維持されていた観点が軽視されるようになったとしても不思議ではない。また、歴史の流れとしては、新プラトン主義が圧倒的な立場になったと見なされている⁽³²⁾。さらに、ポルフュリオス以降、イアンブリコス（245-325）の例外を除いて、もはや「観想」の優位は自明なこととなり学派の主題にはならなかった、とも伝えられている⁽³³⁾。もしそうであるなら、ポルフュリオスに

よる「市民的徳」と「観想的徳」の序列化を、「実践か観想か」「メトリオパテアかアパテアか」という論争の一つの到着点と見なしていいのではないか。これが本稿で示す仮説である。

凡例

本稿で取り上げた文献に関しては、TLG Texts, PHI Latin Corpus を用い、以下の翻訳を参照、ならびに引用させていただいた。論旨の都合上、訳語や文章において変更を加えさせていただいている。

プラトン『プラトン全集』（田中美知太郎、藤澤令夫編）岩波書店、1974-1976

——『パイドン』（納富信留訳）光文社古典新訳文庫、2019

——『饗宴／パイドン』（朴一功訳）京都大学学術出版会、2007

アリストテレス『トピカ』（池田康男訳）京都大学学術出版会、2007

——『ニコマコス倫理学』（朴一功訳）京都大学学術出版会、2002

——『政治学』（牛田徳子訳）京都大学学術出版会、2001

アルキノオス『プラトン哲学講義』（久保徹訳）『プラトン哲学入門』京都大学学術出版会、2008

プロティノス『プロティノス全集』（田中美知太郎、水地宗明、田之頭安彦訳）中央公論社、1986-1988

ポルフェリオス『『新プラトン主義命題集成センテンチアエ：知的なものへの跳躍台』第 1-32 章邦訳』（堀江聡、西村洋一訳）『慶應義塾大学日吉紀要。言語・文化・コミュニケーション』41 号、2009

Arnim, H.von, ed. *Stoicorum Veterum Fragmenta*, Stuttgart, 1903-1905. (SVF)

Aspasius, *Aspasii in Ethica Nicomachea quae supersunt commentaria.*, ed. Heylbut, G. Berolini. 1889.

Alexander of Aphrodisias *Alexandri Aphrodisiensis in Aristotelis Topicorum : libros*

octo commentaria ed.Wallies., M, 1891

——*Ethical problems*, trans. Sharples., R.W, Cornell University Press, 1990

Fleet.B., *Plotinus Ennead IV.8 On the Descent of the Soul into Bodies*, Parmenides, 2012

注

- (1) 田中 2024.
- (2) 以下、引用文中の〔 〕内の語は文献表に挙げられている訳者による補いである。
- (3) 田中 p.14-15.
- (4) 山口 p.34、近藤 p.149.
- (5) φρόνησις は指摘されるように、アリストテレスが後に語るような「思慮」のことではなく（納富 p.47, n.61）、広い意味での「知」である。しかし、後のプロティノス、ボルプュリオスはここでのソクラテスの発言をもとに「思慮」を語っていると考えられるので、ここでも「思慮」と訳す。アリストテレスのそれとの関連については p.28 で言及している。
- (6) 納富（p.63, n.92）に従い、κάθαρσις を「浄化の過程」として、καθαρμοὺς τις を「浄化の目標となるもの」と理解する。
- (7) 『弁明』 20b4-5 において「人間としての、市民としての徳（ἀρετῆς, τῆς ἀνθρωπίνης τε καὶ πολιτικῆς）」が語られる場合、ここで述べられているような区別は想定されていないと思われる。
- (8) ここでの νοῦς は T.17 で語られている φρόνησις と実質的に違いがないと考えられるが、同様の理由で「知性」と訳す。
- (9) 『プロティノス全集』第一巻「解説」 p.182.
- (10) Torri, p.233
- (11) この引用中に「神に似ること」という言葉は出てこないが、この表現はそれに該当すると考えられる。また、「特別な幸福」「最善の生活」と呼ばれていることから、「神に似ること」に関する「最も重要な源」とも言われている（Torri, p.235）。
- (12) 『パイドロス』 247d でも天のかなたの物語として、知性は「真なるものを観想する」

とされている。また、『国家』475eでは「真の哲学者は真理を観想することを愛する人たちである」と言われるが、「観想する人である」とは語っていない。

- (13) 「観想的徳」という言い方は、私が知る限りアリストテレスにはない。「市民的徳」は『政治学』において見いだされるが、そこでは、様々な国制において成立する支配と被支配に関する「市民的徳」が、よき人の「支配に関する徳」との対比で語られており、「観想」との対比で述べられてはいない（1276b16ff.）。
- (14) μέτριος は多くの翻訳で「適度な」と訳されているが、本論ではメトリオパテイアを「節度ある感情」と訳しており、それに合わせて「節度ある」と訳す。
- (15) 牛田『政治学』「解説」p.460-461 参照。またこの「実践」と「観想」をめぐる解釈は近年でも多く論じられている。それについては坂下（1996）が依然として教示的である。
- (16) Sharples, (2010), p.22.
- (17) Moraux, p.250
- (18) 「事柄を行ない、考える」と訳されるように、「通常の文脈において」この言葉を理解することもできる。朴（2002）「解説」p.570。
- (19) Ierodiakonou, p.147. なお本節の「完全な徳」への着目は当論文に負う点が多い。
- (20) Sharples (1990), p.2, n.5.
- (21) アレクサンドロス自身の議論だけでなく、仲間や弟子との討論を含むと考えられている。Sharples, (1990), p.2.
- (22) Dillon, p.232, 362.
- (23) 中畑, p.185.
- (24) 同
- (25) 久保 p.168.
- (26) ここでの「思慮」は「ソフィアと同義」（久保 p.17, n9）と考えられる。また、それぞれの人物が異なった仕方では定義、分類している（Ierodiakonou, p.154）と言うこともできるが、ここでの用法に関しては、T.17 やとりわけ T.2 などでは示されたプラトンの用法とのつながりを指摘することができるだろう。
- (27) Sedley, p.173, Torri, p.240. 本節での「観想」から「実践」への方向性については、Sedley の論文から多くの示唆を得た。

(28) Torri, p.238-244.

(29) Linguiti, p.187.

(30) 当該箇所では語られている「合一」は一者とはではなく知性とのそれであるという解釈が近年では主流であるとの教示を渡辺華月氏から得た（Fleet, 71-72）。詳細に検討することはできなかったが、本論の主張はいずれにおいても成立すると考える。

(31) 本論で取り上げたアスパシオスとアルキノオスとの影響関係については、Moraux, p.271, n.162 において様々な可能性が示されている。

(32) Sorabji, (2005), p.1.

(33) linguiti, p.195.

参考文献

Dillon, J., *The Heirs of Plato*, Oxford, 2003

Ierodiakonou, K., “Aspasius on Perfect and Imperfect Virtues” in *Aspasius: The earliest extant Commentary on Aristotele’s Ethics*, ed. Alberti, A., & Sharples, R.T, W. de Gruyter, 1999

Linguiti, A., “Plotinus and Porphyry on the Contemplative Life”, *Theoria, Praxis, and the Contemplative Life after Plato and Aristotle*, ed. Bénatouil. T. & Bonazzi, M., Brill, 2012

Moraux, P *Der Aristotelismus bei den Griechen*. Band II. W. de Gruyter, 1984

Sedley, D., “The Theoretikos Bios in Alcinous”, ed. Bénatouil. T. & Bonazzi, M., Brill, 2012

Sharples, R.W., *Peripatetic Philosophy 200BC to 200AD*, Cambridge, 2010

Sorabji, R., (ed.) *Aristotle Transformed*, Duckworth, 1990

— *The philosophy of the commentators, 200-600 AD*, Cornell University Press, 2005

Torri, P., “The telos of Assimilation to God and the Conflict between *theoria* and *praxis* in Plato and the Middle Platonists”, in Bonazzi, M., Forcignanò, F. & Ulacco, A. eds. *Thinking, Knowing, Acting: Epistemology and Ethics in Plato and Ancient Platonism*, Leiden, 2019

近藤智彦「ストア哲学」水地宗明他編『新プラトン主義を学ぶ人のために』世界思想社、2014

坂下浩司「アリストテレスの幸福論における観想と実践の結合について」『古代哲学研究室紀要』6号、京都大学西洋古代哲学史研究室、1996

田中龍山「ヘレニズム時代における「感情のない状態（アパテイア）」をめぐる論争」『龍

谷哲学論集』38号、2024

中畑正志「アリストテレス註解と新プラトン主義」水地宗明他編『新プラトン主義を学ぶ

人のために』世界思想社、2014

山口義久「ストア派とプロティノスにおけるアパテイア：内面の自由をめぐって」『新プラ

トン主義研究』9号、2009